

本日は私たち卒業生のために、このような式典をあげて頂き、誠にありがとうございます。ご多忙にもかかわらずご出席くださった皆様に、卒業生一同、心より御礼申し上げます。

私は芸術学部に入學し、専攻を変え大学院に進學し、留学を含め7年間の時を広島市立大学で過ごしてきました。学生として在籍中、本当に、多種多様な方と出会いました。友人、教授、講師の皆様には様々な知見を分けてくださり、共に、経験させていただいたことに深く感謝いたします。

そして、本学の留学生制度により世界のアートシーンを牽引する、最も重要な都市の一つであるドイツの、ベルリンに留学できたことも大きな経験の一つです。日本のアートシーンだけでなく国外の動向にも注目しながら、作品の制作、研究を進めていくと、いま私がどのような歴史の上に成り立った国に生きているのかと、自分自身に問いかけることの重要性に気がつきました。この7年間のうちに、経済、人種、社会、政治、環境問題、オリンピック開催や、ウィルスの蔓延。日本のアートシーンでは芸術祭への、補助金不交付など、様々なことが起こりました。

ドナルド・トランプ氏が大統領に就任したのも留学中の出来事で、ドイツで出会った友人たちは差別に対する問題意識を多くの人と共有していました。またテロが頻繁に起こっていたのもその時期で、張り詰めた空気も同様にあったと思います。そのような状況下で私が強く意識していたのは、私自身が、外国人だということです。私が通っていた大学では、もちろんドイツ人もいましたが、クラスメイトのほとんどがドイツ国外からの生徒たちでした。そのような環境で、同じプロジェクトに参加し、共に展覧会の立ち上げを行いました。私はそういった経験から、コミュニケーションによる創造性を知ることができました。

私はこれまで蓄えてきた知識と経験、そして、コミュニケーションを通し、物事を判断しなければならない、と強く思います。社会を見る力、あるいは見ようとする姿勢は大学生活での経験なくしては得られませんでした。

私は卒業を迎えることになりましたが、まだ、何も終わっていませんし、始まってもしないかもしれません。そして、これから私の身に起こることは誰にもわかりません。しかしながら、大学生活で得た知識や、経験を、現社会で生存するための糧とし、生きていくこと、そのものに対して、有効に使いたいと思います。

最後になりましたが、本日は、本当にありがとうございました。この場に、ご臨席いただきました皆様方のご多幸と、広島市立大学のさらなる発展を願い、謝辞とさせていただきます。

広島市立大学 博士前期課程 芸術学研究科 修了生代表 小松原裕輔